小野 環　油画／准教授
ONO Tamaki

Momoshima Wind-ow 迷子石
もうひとり
2014年
旧赤松医院　サイトスペシフィックインスタレーション
「100のアイデアあしたの島」 尾道市百島

Momoshima Wind-ow迷子石

2012　展示風景 | 2013 崩壊の進行
2012　部分 | 2014 台風直後の様子

2012　無意識の場所での崩壊

小野環と三上清仁のユニット「もうひとり」が尾道市百島における制作に着手したのは2012年。「ART BASE MOMOSHIMA」開館記念展「UTOPIA――何処にもない場所」に参加したことが契機となって、その後、継続的に制作を展開させてきた。

離島である百島の環境のなかで私たちが注目した場所は、百島公民館近くにあるかつて島で重要な役割を担っていた赤松医院とその一帯であった。赤松医院は当時、島で唯一の病院として重要な役割を担っており、建物も、洋館を併設した立派なものであった。しかし、その建物は50年近く空き家となっており、人の手が入らない状態が続いたため、荒れ果て、狸の巣となっていた。雨漏りも建物各所で起き、離れの病棟の一角では崩壊がかなり進行していた。庭木も、伸び放題で、傘のように庭を覆い、庭全体が暗がりとなっていた。

私たちの制作はまず、その状態を観察するところからスタート。崩壊の過程自体に新たな視点を与えることが重要であると考え、プランニングを始めた。崩壊の過程には人為と自然との葛藤が表れている。そこには流れて来た時間の厚みや、自然のもたらすエネルギーが可視化されているのだ。崩壊が進行している病院部分には、崩壊状況を周囲から切り離し、ディ

旧赤松医院　2012年8月

テールを顕在化させるためにブルーのバックパネルを設置。母屋の正面には庭木で出来た暗がりを穿つよう青い光を放つ新たな窓を開けた。2012年には病院敷地内だけでなく、近隣の空き地や、醤油工場の跡地にも介入する作品を制作した。

2013～2014　迷子石

2013年は前年度の状況を維持する方向性で再び制作を行った。しかし、病棟の崩壊は更に進行し、天井部分も崩落。もはや倒壊までわずかとなっていた。2014年の夏には台風や局地的豪雨の影響を受け、現地を訪れた秋には設置したバックパネルも崩壊し、昨年まで残っていた病院建築の壁部分もほぼなくなり、一角は瓦礫と化していた。

私たちはまず瓦礫の片付けを行い、バックパネルのメンテナンスを進めていった。建物が崩壊したその場所には瓦や柱、梁等の木材や壁土、石膏ボード、壁紙等のインテリアだけでなく、電気配線や蛍光灯、碍子等様々なものが積み重なっていた。瓦礫の除去を進めていくと、薬瓶や、錠剤、スリッパやポストカードなどかつて病院であった記憶を留めるものたちを数多く発見することが出来た。

私たちはそれらの崩壊した部材や生活の断片を集積し、家の記憶を凝縮した彫刻「迷子石」を制作することにした。「迷子石」とは氷河によって削り取られた岩塊が別の場所に運ばれ、氷河が溶け去った後に取り残された岩のことで、多くの場合、その場の地質とは異なる岩が不自然な形で留まるため、まるで誰かが意図的に置いたかのように見える。私たちはスイスにおける滞在制作※でその存在と出会い、以降、変化し代謝していく街の中で取り残された違和感のある存在を「迷子石」として作品化してきた。百島では、家の記憶を留めた瓦礫で再構築された迷子石を青いパネルの前に、地面から浮かせるかたちで設置した。その場で生成された石はこれまで存在し続けて来た場所を離れ何処かへと動き始めるのだろうか。場の記憶を凝縮した塊は行き先を失ったまま宙吊りにされているようでもある。

※もうひとりは2013年スイスジュネーブのアーティスト・イン・レジデンス「UTOPIANA」で約一ヶ月の滞在制作をおこなった。

迷子石

左　氷河で

右　レマン湖にある有名なもの

下　ジュネーブ「Utopiana」で、もうひとりが制作した迷子石